

平成29年度中学入試

[前期A入試]

国語科 問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙を含めて16ページあります。

試験中に、印刷が見つらかったり、ページが乱れたり抜け落ちていることに気づいた場合は、手を上げて監督者に知らせなさい。

3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[前期A入試] 受験番号_____

金蘭千里中学校

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

主人公の大介は小学六年生で、隣家に住む老人佐藤 北海に興味を抱いていた。夏休みのある日、両親とけんかをして家出を考えていた大介は、ちょうど旅に出ようとしている北海の後を追いかけて二人で旅することになった。本文は、旅の途中知り合ったトラック運転手の高村が、二人をトラックに乗せてくれた場面である。

高村はサービスエリアで（注1）ハイライトを（注2）一カートン買ってきっていた。彼のたばこを吸うスピードは速かった。たばこを吸わないときは、ラジオと一緒に歌を口ずさんでいる。高村はいろんな歌を知っているようだ。ハンドルを軽くさばきながら、彼は楽しそうに見えた。

楽しいのだろうか。大介は父の言葉を頭の中でA反芻して、考え込む。父の主張が正しいならば、高村は今こうしてトラックを運転しているaケンジョウを、好ましいものではないと捉えていなくてはいけない。なのに、全然そういう感じではない。ふうと吐いたたばこの煙が、窓の外の風にまぎれてたなびいていく。

「高村さん」

「おう、なんだ？」

「高村さんは、子供のころからトラックの運転手になりたかったの？」

「いや、特になんとも思ってたなかったなあ」

「じゃあ、なんでなったの？」

大介の左横で北海が鼻から息を抜く。「そうだな、おまえはこの間も怒られていたもんなあ」

あの父のかみなりが、隣家の北海にも聞こえていたのだ。夏場で窓を開けていたせいだ。

高村が「大介が怒られたのと俺がトラック運転手しているのが、なんか関係あるのか？」と訊いた。

① 大介は口をつぐんだ。関係を説明するには、父がどんなことを言っただけで怒ったのかを話さなければいけない。高村が聞けば気を悪くするだろう。

けれども高村は陽気に、「なんだよ、言えよ。おしえてくれよ」と大介をせっついた。

困った、どうすればいいだろう。

助けを求めるように左横に目を動かしても、北海は反応してくれない。しつこい高村に根負けして、大介は腹を決めた。

「僕の成績が悪いと、お父さんは怒るんだけど、怒り方がいつも同じで、言うことも一緒なんだ」

「親は怒るよなあ。俺も良くなかったから覚えがあるぜ。で？」

「こんなんじゃ、いい大学に行つていい会社に入れない。おまえは将来工場の作業員やトラック運転手になりたいのか、って」

ああ、やっぱり言わなければよかった。怒りにまかせて、高村の右足が急にアクセルをベタ踏みしたらどうしようか。運転が荒くなった、きつと酔ってしまう。そればかりか事故になったら。大介はやっぱり何と言われても黙っておくべきだったと、激しく（１）しながらハンドルを握る右手を見た。

なのに高村は、まるで気にする様子もなく笑い飛ばしたのだった。

「そうか、大介の父ちゃんはそんなことを言うのか」

高村は短くなったハイライトを灰皿で潰し、片手でハンドルを**ソウサ**しながらもう一本に火をつけた。

「父ちゃん、なにしてんだ？」

なにしてんだは、この場合、仕事のことに違いない。大介は混乱から来る（２）を自らの意思で鎮めようと試みながら、父が**Ｃツト**める保険会社の名前を言った。

「おー、すげえでかい会社だなあ。そりゃあ周りからはいい会社につとめてるなって言われるし、給料もいっぱいもらえんだろう、俺よりは」

父の給料がどれくらいなのか、大介には見当もつかなかったが、少なくともはずだった。お小遣いやお年玉の額は、漏れ聞こえてくる級友たちのものより多かった。父も工場の作業員や運転手より聞こえが良く、稼いでいる自信があるから、侮蔑的なことも平気で口にするのだ。

改めてそんな父に（３）を覚えていたら、高村がハイライトの煙とともに言葉を吐き出した。

「でも俺は、こいつで走るんでいいなあ。もしよ、おまえの父ちゃんの会社に入れてくれるって言われても、断っちゃうな」
ラジオから流れてくる楽しい流行歌を、共に口ずさむように。

「性に合わねえってやつかな。小難しいことはわかんねえけどさ」

顎をしゃくるようにして、高村はフロントに置いてあるハイライトの一箱を示してみせた。

「大介、おまえ、このたばこ一つ、いくらするか知ってるか？」

大介は近所のたばこ屋の店先を、記憶の海から引き揚げる。あそこに値段は書いてあったか？あるいは自動販売機の表示は。「百円くらい？」

「今年の四月に百五十円になったよ。三十円値上げしやがった」

「三十円なら大したことないね」

遠足のおやつを買うとき、きっちり上限の三百円まで使い切るには、ある種の工夫が必要だ。食べたいおやつだけでは、どうしてもちようどんにはならない。そんなとき、五円や十円の小さなチョコレートやキャンディ、ガムを見繕う。大介にとって三十円とは、メインのおやつとおやつの間を、そういった駄菓子で埋める金額だ。

しかし高村は「大介は三十円稼いだことがあるか？」とにやりとした。

「二千円くらい入っていた財布を拾って届けて、半年後に僕のものになったことならある」

「拾うんじゃないよ、自分の体使って、汗水たらして三十円稼いだことはあるかって」

あるわけがない。小学生なのだ。

とはいえ、「小学生だからそんな経験はない」と言い返すのは、ためらわれるものがあつた。自ら「僕は子供です」と主張しているようだからだ。

高村だってそれをわかって訊いている。その証拠に、口を閉ざした大介を見てさらに満面の笑みを浮かべ、ハイライトをいったん灰皿に置くと、大きな手で帽子ごと大介の頭を乱暴に撫でた。

「②じゃあよ、おまえちよつと仕事してみろ」

大介は目を見開いた。

「仕事？ なんの？」

助け舟が出ないかと北海に目で訴えるも、北海も先ほどの不機嫌そうな様子はどこへやら、高村と一緒に③にやにやしている。

「俺、一応大介たちが座るところとかをよ、今日出発する前にきれいにしたんだ。でもすごくぴかぴかになってわけじゃねえだろ。だからよ、その物入れに布きれあるからよ、それで前のほうとか拭いてくれねえかな。あと、灰皿にも吸殻がたまってきたきているだろ。きちんと火が消えて冷たくなってるか確認してから、ビニール袋にあって、俺とじいさんが気持ちよく使えるようにしてくれねえかな」

言ったそばから高村は、吸っていたたばこを灰皿に押しつけて中身を増やした。

「じいさん、一本どうぞ」

「おう、いただくよ」

「後ろはよ、俺の釣竿あるから、そのままでもいいからさ。前な、前の、大介とじいさんが座ってる周り」

そうして大介の両隣で二人ともまた吸いはじめる。明らかに灰皿を満杯にしてやろうという魂胆だ。大介は文句を言いたくなかったが、悔しいことに北海はたばこを吸っているから高村の味方だ。仕方なく言われた物入れを開けて、薄いタオルのような布を取り出した。それを折りたたみ、面を替えながら、手の届く範囲をこしごしと拭く。席に座ったままでは無理だったので、大介は腰を浮かせた。トラックはほとんど揺れず、滑らかに走行したので、よろけることはなかった。北海も大介のジーンズの腰を、ぎゅっと掴んでいてくれた。

おおむね片づけられているように見えた助手席近辺だが、いざ拭いてみると布はみるみる黒ずんだ。シートの陰にたばこをdホウソウしていたビニールが落ちていたりもした。

「窓を開けるし、たばこも吸うから、どうしても汚れるのさ」

高村は横で動く大介を上手く避けつつ運転しながら、B悪びれずにそんな言い訳をする。

高村が三本、北海が二本ハイライトを短くする間、大介は酔うかもしれないということすら忘れ、かわりになんでこんなことをさせられているんだろうという不条理感を抱きながら、気のいいはずの人使いの荒いあんちゃんの言うとおりにした。

最後にたまった吸殻の一つ一つにちゃんと触れ、火はもちろん、熱も冷めていることを確認してから、ビニール袋に灰皿の中身を移した。袋のほうはきっちり口を結び、空になった灰皿を元あったところに収めた。

「終わったよ」

「おう、ご苦労さん。その吸殻が入った袋、こっちによこせ」

高村はシートの下からパイナップルの缶を取り出した。缶は空のようだった。ビニール袋は缶の中に押し込まれた。

「じゃあ、給料だ」

高村は握った左手を押し付けてきた。思わず両手で受け止める恰好を取ると、彼の手は開かれた。

十円玉が三枚、大介の手の中に落ちてきた。

「きれいに掃除してくれてありがとうな」

いろいろな人間の手を経てきたのだろう、くすんだ茶色の硬貨をどう取り扱うべきか、大介は少し困った。たった三十円、特段嬉しくはない。一方でこんなお金はいらないと突っ返す気にもならない。

「どうして金がもらえたかわかるか？」

北海だった。大介は老人と目を合わせた。彼は時刻表のとあるページを開いたまま膝の上に伏せ、左腕を開け放した窓にかけて頬杖を突きながら、右の人差し指で硬貨を一つずつ突いた。

「こいつの分、あんちゃんの役に立ったからだよ」

北海は高村にバトンを渡す。「なあ、あんちゃん」

「そうさ。大介は俺の役に立った。だからありがとうな、で三十円だ」高村はまた、大介の頭に左手をやった。「俺はおまえの父ちゃんほど頭も稼ぎもよくねえけどよ。これだけはわかるぜ。もし俺がここでトラックを放り出して、あれだ、後ろの釣竿持って海にでも行ったらよ、大阪で積荷のうなぎを待つてる誰かが困るんだ」

「困る？」

「そうだよ。仕事ってのは④そういうもんだと俺は思ってるぜ。大きな会社ですげえ仕事をしているおまえの父ちゃんも、おまえの父ちゃんからしたら小馬鹿にしたくなるような俺も、今ここらをきれいにした大介も、根っこは同じだ。おまえ、犬のクソをくれたやつにありがとうって金を払うか？」

「払わない」

「だろ？ 仕事はその逆さ。仕事はよ、どんなにつまんなく見えても、どっかで誰かの役に立っているのさ。ありがとうって思われている。だから金がもらえるんだ」

手のひらの三十円が、少し重さを増したように感じられ、大介はそれをじっと見つめた。

「次のサービスエリアでも、大阪に着いてからでもいいさ。大介おまえ、その三十円でなんか買ってみろよ。三十円で買えるもんなら、買えるはずだ」

「小さなチョコとか、ガムとか？」

「そうさ。そいつは三十円。誰が持っていようと、三十円の価値がある」

大介は顔を上げ高村を見た。高村はまだ続けた。

「大きい保険会社で働いてもらおう大介の父ちゃんの一万円札とよ、トラックを運転してもらおう俺の一万円札をよ、比べてみろよ。俺が持っているからって半額にはならねえし、おまえの父ちゃんが持っているからって十万円に増えるわけもねえ」高村は新しく火をつけたハイライトを、うまさうに吸う。「真っ当に働いて稼いだ金なら、誰が持っていようが価値は平等だと俺は思うよ。だから、なにがいいも悪いもねえよ」

少ししゃべりすぎたなあと照れくさそうにする高村の横顔を見つめながら、大介は彼が言った言葉すべてを頭に刻もうとした。この旅が終わって家に^{もど}り、怒られる場面になって、父がまたあの決まり文句を投げかけてきたら、高村が言ったとおりのことを返してみたいと思った。

それに対する父の反応も知りたい、とも。

大介は手の中の三十円を、力を込めて握りしめた。手が臭^{くさ}くなるなんてことはどうでも良かった。

この世の中には大勢の人がいろんなことをしてお金を稼いでいる。仕事をしている。誰かに求められて、誰かの役に立っている。

いつもよりずっと早起きをして乗せてもらったこのトラックを、高村は「今日はゆっくりの出発さ」と言った。深夜から午前三時、四時のほうがトラックは多いと。普段^{ふだん}なら大介はもちろん大介の父も、まだ眠^{ねむ}っている時間だ。その時間に、トラックの運転手は働いていた。働いているすべての人が、大介には手の届かない（X）に思えた。そして生まれてから今までの十二年間で一番身に染^しみて、自分は

（Y）だとeツウカンした。

高村は次のサービスエリアに寄ってくれた。大介は売店で小さなチョコレートと餡^{あん}玉^{だま}を三十円分買った。それらは全部食べてしまったが、ホウソウ紙は捨てられなかった。大介は⑤それを大事に財布の中の一万円札と一緒にした。

（乾ルカ『花が咲くとき』一部改めたところがある）

（注1）ハイライト……タバコの名称。

（注2）一カートン……タバコを十個箱づめにしたもの。

(一) 波線部 a ㄣ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ゲンジョウ b ソウサ c ツトめる d ホウソウ e ツウカン

(二) 二重傍線部 A・B の意味としてもっとも適切なものを次のアㄣエの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 反芻

ア 具体的に考えること

イ 批判的に考えること

ウ くり返し考えること

エ しつかり考えること

B 悪びれずに

ア まじめそうな様子で

イ 平然とした様子で

ウ はずかしそうな様子で

エ 落ち着かない様子で

(三) 傍線部①「大介は口をつぐんだ」とあるが、どうして「口をつぐんだ」のか、七十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

(四) (1) (ㄣ 3) にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のアㄣオの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(同じものをくり返し使ってはいけない)

ア 動揺

イ 断念

ウ 執着

エ 反発

オ 後悔

(五) 傍線部②「じゃあよ、おまえちよつと仕事してみろ」とあるが、作業する「大介」に、「北海」と「高村」が協力してくれていることが分かる二文続きの表現がある。最初の五字を抜き出して答えなさい。(句読点を含む)

(六) 傍線部③「にやにやしている」とあるが、このときの「北海」の気持ちとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大介の反応が予想どおりだったのでうれしい気持ち。

イ 大介に仕事などできるはずがないとばかりにする気持ち。

ウ 大介が無事に仕事ができるようはげます気持ち。

エ 大介がどのようにこたえるかおもしろがる気持ち。

(七) 傍線部④「そういうもんだ」とあるが、「高村」は仕事をどのようなものだと言っているのか、三十字程度で答えなさい。(句読点を含む)

(八) (X)・(Y)には反対の意味の言葉が入る。その言葉を考えて、それぞれ漢字二字で答えなさい。

(九) 傍線部⑤「それを大事に財布の中の一万円札と一緒にした」とあるが、その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三十円もらっても大した金額ではないと思っていたが、実際に買い物してみると価値があると実感し、高村のためにも大切にしなければならなかったから。

イ 三十円もらっても最初は嬉しくはなかったが、仕事というものがどういうものなのかを教わったので、そのことを忘れないようにしようと思ったから。

ウ 三十円もらって嬉しかっただけでなく、仕事をしてやっと手に入れたものだから、父親に見せるためにも大切にとっておこうと思ったから。

エ 三十円もらって嬉しかったので、チョコレートと飴玉を買って食べたが、残った紙を簡単に捨てることはできないと思ったから。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

20世紀は、科学とそれに基^{もと}づく科学技術がひじょうに発達した時代でした。しかし、残念なことに、20世紀の後半は「とにかく産業（経済）を盛^{さか}んにしよう」という考えが強くなり、産業に役立つ科学技術だけを素^す晴^はらしいものだと思^{おも}い込^こんでしまったのです。知識を得るというより、みんなが健康になるため、さらに産業を興^{おこ}してお金^{かね}儲^もけをするため……そういうことのためだけに科学はあると捉^とえられたのです。科学に関する書籍^{しよき}やテレビ番組なども「こんなに役に立つ」「こんなに健康にいいことがある」という視点のものが多^{おほ}いのです。

もちろんそれは大事なことで、全否定するつもりはありません。ただ人間の役に立つとか健康のためと考えると、どうしても「答え」が必要になります。「こうすれば健康に暮^くらせます」、「こうすれば経済活動を活発にできます」という答えを出すためにだけに科学があるのではないと私は考えています。

現実^{げんじ}に起^{おこ}きていることには対応しなければなりません。でも答えを科学だけに求めるとどうしたらよいのかわからなくなり、政府も自治体も X することになります。最先端^{さいせんたん}の科学技術を持っているといわれる日本ですが、考えなければならぬことがありそうです。

① このような現状を見ると、今まで欠けていたものが見えてきます。すべてのものには答えがあるから、それに沿^よって行動すればいいと私たちは思い込んでいましたが、そうではなかった。本来、科学とは「自然はどういうものなんだろう」「宇宙^{うちう}ってなんだろう」「地球とはいったいなか」「生き物や人間はどうして生きているんだろう」ということを考えるもの。そうして考えていけば、科学は各自の世界観^{けん}をつくってくれるはずなのです。「考える」ことが重要なのです。答えはもちろん大事であり、考えて考えて考え抜^ぬけば答えは出てきます。しかし、一つの答えが出てくると、もっと難しく、でもおもしろい問いが必ず生まれてくる。「答えを見つけたらオシマイ」ではなく、ずっと考えつづけること。これがとても大切なのです。

では、② 私たちはこれからどんな世界観^{けん}を持^もてばいいのでしょうか。

過去^{かこ}を振^かり返^{かえ}ると、科学は17世紀以降の300年間にわたり「機械論^{きかいろん}的世界観^{けん}」を有^もしていました。簡単にいうと「宇宙や生命、人間をすべて機械^{きか}と考^{かん}えて調べればいいのだ」という世界観^{けん}です。ガリレイは「自然は数字で書かれた書物」、ベーコンは「自然の操作的支配^{しはい}」、デカルトは「機械論^{きかいろん}的非人間化^{ひじんかんか}」、ニュートンは「粒子論^{りゅうしろん}的機械論^{きかいろん}」という言葉や考^{かん}え方^{かた}を出^だしました。

たしかに、分子生物学でDNAやたんぱく質の働きを調べてみると、生物も機械^{きか}のように動^{うご}いていることがわかります。でも人間^{じんぐう}を含む生きものは機械^{きか}かと問^とわれれば、それは違^{ちが}います。しかし、aジユウライの科学技術を生み出すための答えを求めるには、機械^{きか}として考^{かん}えた方が効^{くわ}率がよかつたのです。

生きものが生まれたのは38億年ほど前とされます。地球上には、名前が付いている生きものだけで170万種が生息しています。しかし、ほんとうはbネットワークを中心になん千種類いるはずと考えられています。まだ名前が付いていない、あるいは発見されていない生きものがたくさんいるからです。まだ不確かなことの多い生きものですが、一つだけはっきりわかっていることがあります。どこに棲すんでいる、どんな姿かたちをしていても、生きものはみな細胞さいぼうから成り、細胞のなかにはDNAが入っているということです。

ここから地球上にいるすべての生きもののcセンは、ある一つの細胞と考えられます。地球で生まれた最初の生命体が現在の生きもの共通のソセンなのです。今から38億年前の地球には細胞があったことは化石によって確認かくんされています。

つまり、皆みなさんも含めて地球上の生きものは、体のなかに38億年の歴史を持っているのです。皆さんの細胞のなかにあるDNAは、父親と母親から半分ずつ受け継いでいますね。では、お父さん、お母さんを考えてみると、おじいさん、おばあさんから受け継いでいるはず。そうしてたどっていけば、誰だれもが③人類のソセンに還かえるわけです。さらにDNAを解析かいせきしていけば、人類のソセンからもっと遡さかのぼることができて、最終的には38億年前の最初の生命に戻もどるのです。38億年という途方とほうもない時間が自分の体内に残されているという事実を知ると、生きていることの重みを感じませんか。

時間をかけてできあがってきた自然界は生きもののようなのです。この考え方を「生命論的世界観」と言います。300年もの間、科学は「機械論的世界観」で進められてきましたが、どうも「生命論的世界観」の方が実態に合っていると考えられるようになってきたのです。「人間は生きものであり、自然の一部である」というあたりまえのことが「生命論的世界観」のいちばん大切な部分です。これからの科学は、「生命論的世界観」がベースになります。

機械と生きものの違いを考えてみます。機械は「構造と機能」がわかればOKです。しかし生きものはそうはいきません。たとえばアリの理解しようと思ったとき、アリのバラバラに分解しても本質はわかりません。そのアリはどのような姿になったのか。38億年の歴史とほかの生きものたちとの関係を読み解かない限り、ほんとうの意味でアリの理解したことにはならないのです。

もう一つ付け加えると、機械はどれも均一にすることが大事ですが、生きものはどれだけ多様になるかが大切です。

追求することも違います。機械はYを追いますが、生きものはZを重視します。生活がどんなに便利で豊かでも、人類という種が途絶たつたえてしまったら意味がありません。「つづく」ということの意味を考える必要があります。

38億年前に生まれた小さな脂肪しぼうからさまざまな生きものが生まれ、ときどき絶滅ぜつめつの危機に瀕ひんしたけれども乗り越えて、そうするうちに霊長類れいちょうるいの仲間から二本足で立つちよつと変わった生きものがdタンジョウしました。人間は20世紀に大きなビルが建ち並び、その間を電車や自動車が走り、飛行機が空を飛び、コンピュータが至るところで使われる、そういう社会をつくってきました。人間がeノウなど独自

の能力を生かしたことはとても重要です。だからこそ、このような社会をつくることができたのですから。それを否定しませんが、でも人間は自然の一部であるということを忘れてはいけません。都市や先端技術といった文明社会だけでは、人間は生きられません。

今お話したような新しい世界観を支える言葉を最後に紹介します。「愛づる」です。この言葉は、平安時代後期の短編物語集『堤中納言物語』に収められている「虫愛づる姫君」という物語からfハイシャクしたものです。少し説明しましょう。

およそ1000年前の京都に、ちょっと変わったお姫さまが暮らしていました。男の子たちに虫をたくさん集めさせたうえ、1匹ずつ名前をつけてかわいがっていたのです。お姫さまのいちばんのお気に入りには毛虫でした。「かわいい、かわいい」と大切にしていた。だから「虫愛づる姫君」なのです。両親はちょっと困っています。このお姫さまは（注1）裳着を済ませたりっぱな成人（13歳くらい）なのですが、（注2）お齒黒や（注3）引眉といった当時の女性がしていたお化粧をまったくしないのです。両親が注意しても「人間はそのままの姿がいちばん美しいのだから」と相手にしません。あるとき、両親が毛虫をかわいがっているお姫さまに「そんなことばかりしていたらダメですよ」と注意します。しかしお姫さまはこう言いました。「みんなはチョウになったらかわいいと言い、毛虫のときは気持ち悪いと言う。でも、チョウになったらすぐに死んでしまうのだから、むしろ生きる本質は毛虫にあると思うのです」と――。

「この姫君はすばらしい」と思うのです。日本文学のなかでは変人と言われていますが、生きものをよく見つめ、真剣に調べて、その本質をつかんだうえで自分の生き方を選択しているのです。これは現代に通じる世界観だと思います。

1000年前からつづく、自然を大切にする日本の文化を受け継ぎながら、コンピュータなど新しい技術を生んだ20世紀も踏まえたうえで、新しい技術や科学技術をつくっていくこと。21世紀はともチャレンジングな時代です。私は④このような新しい社会はできると思います。逆にできなければ、人間の未来はあまり明るくないでしょう。

自分の体のなかには38億年にもおよぶ生きものの歴史が入っているという事実。それをベースにものごとを考えていく「生命論的世界観」を持つこと。それを忘れないで、日常生活を過ごすようにして下さい。皆さんが進学してこれから何を学ぶのかはわかりません。しかし、21世紀という時代を生きていくための一つの考え方として、今日の話を頭の隅に置いて下さったら嬉しく思います。

（中村桂子『科学は未来をひらく』一部改めたところがある）

（注1）裳着：主に平安時代、女子が成人して初めて裳（腰から下にまとった服）をつける儀式。

（注2）お齒黒：齒を黒く染めること。

（注3）引眉：眉毛を抜き、またはそったあとに眉ずみで眉をかくこと。

(一) 波線部 a～f のカタカナを漢字に直しなさい。

a ジュウライ b ネットイウリン c ソセン d タンジョウ e ノウ f ハイシャク

(二)

 に当てはまる四字熟語としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 創意工夫 イ 七転八起 ウ 右往左往 エ 有言実行 オ 付和雷同

(三) 傍線部①「このような現状を見ると、今まで欠けていたものが見えてきます」とあるが、「科学」に関するどういったことが見えてきたのか。それを次の文のように説明した。

には適切な言葉を考えて記し、

 には本文からふさわしい表現を抜き出し、それぞれ指定された字数で答えなさい。(句読点を含む)

科学とは

 のではなく、本来は、自然、宇宙、地球、生き物や人間について、

 ことが、大切だということが見えてきた。

(四) 傍線部②「私たちはこれからどんな世界観を持てばいいのでしょうか」とあるが、その答えとなる語句を七字で抜き出しなさい。

(五) 傍線部③「人類」とあるが、これを言い換えた言葉を十八字で抜き出しなさい。

(六)

、

 に当てはまる語句としてもっとも適切なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Y	…ア 均一性	イ 機能性	ウ 利便性	エ 合理性
Z	…ア 継続性	イ 耐久性	ウ 歴史性	エ 多様性

(七) 傍線部④「このような新しい社会」の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他の生きものにはない独自の能力を生かして築き上げた都市や先端技術を人類の財産とし、今後もよりよい文明を作るためにそれらの発展だけに挑戦していくような社会。

イ 便利な社会を実現するために発展しすぎた科学を一度否定し、今後は人間と生きものとの共存を第一に考えた方法で自然に貢献していくような社会。

ウ 人間は自然の一部であるという考え方を忘れず、今まで築き上げてきた文明社会で培った技術を、将来のためにさらに発展させていくような社会。

エ 自然と人間は根本的なところでは相入れないものであるが、それでも人間の使命として、できる限り自然を大切にするために科学技術を使っていくような社会。

(八) 「虫愛づる姫君」について、筆者はなぜこの話を紹介しているのか。「虫愛づる姫君」は、「」に続く形で、六十字以内で答えなさい。(句読点を含む)

【問題は以上で終わります】

①

(八)			(七)			(五)			(四)			(三)			(二)			(一)		
X									1					A		d	a			
Y									2					B						
																e	b			
(九)						(六)			3											
																	c			
																	める			

②

(八)				(六)		(五)		(四)		(三)		(二)		(一)	
				Y				II	I			d	a		
				Z											
												e	b		
				(七)								f			
													c		

「虫愛づる姫君」は、

得点	
受験番号	

① 60点満点

(一) a 現状 b 操作 c 勤める d 包装 e 痛感

(二) A ウ B イ ②×5
③×2

(三) 成績が悪いと将来工場の作業員かトラック運転手にしかなれないと言って父が怒ることを、
トラック運転手の高村が聞くと気を悪くするかもしれないから。(七十字)

(四) 1 オ 2 ア 3 エ ②×3
⑥

(五) トラックは ⑤

(六) エ ⑤

(七) どんなにつまらなく見えても、どこかで誰かの役に立っているもの。(三十一字)

(八) X 大人 Y 子供 ⑤ (完答)
⑤

(九) イ

② 60点満点

(一) a 従来 b 熱帯雨林 c 祖先 d 誕生 e 脳 f 拝借

(二) ウ ②×6
④

(三) I 答えを出すためだけにある(十二字)
II ずっと考えつづける(九字) ⑤
③

(四) 生命論的世界観 ⑥

(五) 二本足で立つちよっと変わった生きもの ⑥

(六) Y ウ Z ア ③×2
⑥

(七) ウ ⑥

(八) 生きものをよく見つめ、真剣に調べて、その本質をつかんだうえで自分の生き方を選択しており、
これは現代に通じる世界観だから。(六十字) ⑫